宮本文昭オーボエリサイタル

ピアノ：寺嶋陸也

ソナタ　ヘ長調 Op.17……ベートーヴェン
（原曲：ホルンソナタ）

アダージョとアレグロ　ヘ長調 Op.70……シューマン

オーボエソナタ　ヘ長調……ドニゼッティ

オーボエソナタ　Op.166……サン＝サーンス

冬

2000 四季のコンサート
ふれあい音楽会

2000年12月3日（日）6:45PM
会場：浜松市教育文化会館
主催：浜松音楽友の会

プロフィール

宮本文昭（オーボエ）

1968年桐朋学園高等学校音楽科を卒業。卒業時「音楽賞」を受賞。その後デットモルト市の北西、ドイツ音楽アカデミーに入学しオーボエの名手ヘルムート・ヴィンシャーマン氏に師事。1972年同校を首席卒業。1975年芸術祭優秀賞受賞。西ドイツ・エッセン市立交響楽団オーボエ首席奏者に就任。1977年にフランクフルト放送交響楽団首席オーボエ奏者、又1982年にはケルン放送交響楽団首席オーボエ奏者に就任。これまでにハープの蘇崎史子、ジャズピアノの前田憲男と山下洋輔、ギターの渡辺香津美、和太鼓の林英哲、シンセサイザーの難波弘之など、ジャンルをこえたアーチスト達と多数共演し、オーボエの新しい可能性を拓く。また室内合奏団との協演も数多く、イギリス室内管弦楽団、ミラノ・スカラ座弦楽合奏団、ケルン室内管弦楽団、アメリカのセントポール室内管弦楽団、水戸室内管弦楽団など世界各地に活躍の場を拡げ、大成功を収めている。1999年、NHK朝の連続テレビ小説「あすか」のテーマ曲を担当。ケルン放送交響楽団を辞任し、本拠地を日本に移す。今後の更なる活躍が期待される。現在、東京音楽大学教授。

寺嶋陸也（ピアノ）

東京芸術大学音楽学部作曲科卒、同大学院修了。86年第1回摂津音楽祭L.C.コンクール金賞受賞。在学中より作曲とピアノ演奏の両面で積極的に活躍、特にオペラシアターこんにゃく座での演奏や、89年シアターコクーンのオープニング公演「ホフマン物語」の音楽監督、97年東京都現代美術館でのポンピドー・コレクション展開催記念、サティ連続コンサート「伝統の変装」などは高く評価された。作曲のほか、室内楽を中心とするピアノの演奏やコンサートの企画、99年からは美幌町の音楽祭の音楽監督を努めるなど、活躍は多方面にわたる。

宮本文昭
オーボエリサイタル

FUMIAKI MIYAMOTO
OBOE RECITAL

曲目解説　宮本賢二郎

●ベートーヴェン／ソナタ　ヘ長調　Op.17

この作品は、1800年ベートーヴェン29歳の年、初期作品の締めくくりにあたる時期に作曲された。原曲は、有名なヴィルトゥオーゾホルン奏者であるヨハン・シュテヒ（ブント）の演奏のために作曲された。ベートーヴェンの初期のピアノソナタに通じる明快な形式、快活なメロディーとメランコリックなメロディーの対比が特徴的だが、この曲はコンサートの前日、僅か一日の間に作曲されたと伝えられている。それにも拘わらず、ホルンの特徴をよく捉えた作品に仕上がっており、ベートーヴェンがこの楽器の制約や特徴に精通していたことを示している。

第一楽章はホルンの狩猟の合図を思わせる音形に始まり、中間部ではレガートな音形でやわらかな音色を生かし、終結部でアルペッジオによる技巧を見せる。第二楽章は静寂の中に送葬行進曲風のメロディーが繰り返され、短いながらも大きな対比と効果を生んでいる。第三楽章は快活で流麗な主題を持ち、終結部で技巧を披露して曲を閉じる。

この曲をオーボエで演奏することはまれであるが、オーボエがもともと牧歌的な性格を持ち合わせ、しばしばオーケストラでは角笛の音を表現することからも、新鮮で楽しみな選曲といえるだろう。

●シューマン／アダージョとアレグロ　ヘ長調　Op.70

シューマンが1849年、革命の波が押し寄せるドレスデンで作曲したこの曲も前曲同様ホルンのために作曲されたのだが、この頃ホルンに通風弁が開発され、半音階が自由に演奏できるようになったこと、そしてこの新開発の楽器が、ワーグナーのオペラで使用され活躍したことが、シューマンの創作意欲を掻き立てたようだ。ホルンのために作曲されたこの作品は、ヴァイオリン、チェロ、ヴィオラなど弦楽器をはじめ、チューバなど、他の楽器で演奏される機会も多い。

前半のゆったりとした序奏部分では、シューマンらしい半音階的に行われる豊かで柔軟な和声の移り変わりの中で、オーボエが夢見るような情熱に満ちた旋律を歌う。アレグロ部分では、一転して快活で歓喜に満ちた主題が奏され、時折序奏部のメロディーによる幾分落ち着いた部分をはさみながら、全体としては一気に終結に向けて盛り上がっていく。小品の中にもシューマンの真骨頂である夢見る叙情性と、和声豊かで華やかな技巧がよく現れた傑作といえる。

●ドニゼッティ／オーボエソナタ　ヘ長調

ドニゼッティは初期ロマン派の軽妙なオペラ「愛の妙薬」や「ランメルモールのルチア」など、数々の名高い作品を書いている。この作品は彼がオペラ作曲家として大成する以前の作品で、アンダンテとアレグロの２部からなり、形式や旋律の特徴、伴奏の音形やメロディーとのやりとりが、モーツァルトやロッシーニのアリアを多分に思わせる。たとえば、モーツァルトの「フィガロの結婚」の伯爵のカヴァレッタとアリア、ロッシーニの「セヴィリアの理髪師」の前奏曲やフィガロのアリアなど。器楽曲を書きつつドニゼッティの関心がもっぱらオペラの作曲にあったことが十分わかる作品といえる。とはいえ、このオペラ作曲家の筆によるオーボエのための小品は、ベートーヴェンやシューマンの作品とは全く違った、「歌う」という音楽の原点がオーボエの音色に見合った旋律の流れの中に見事に表現されており、軽妙で親しみやすい作品となっている。

●サン＝サーンス／オーボエソナタ　Op.166

「動物の謝肉祭」や「オルガンつき交響曲」で知られるサン＝サーンスはロマン派後期の作曲家の中でも古典派として知られている。この曲は彼の最晩年の1921年に作曲され、「動物の謝肉祭」に見られた風刺や、ユーモラスな雰囲気、またバイオリンやピアノの小品に見られるような情熱や官能性は影を潜め、古典的な性格の強い、回顧するような、落ち着きのある作品となっており、作曲家の人生最後の境地が窺われる。

第一楽章では「パッヘルベルのカノン」を思わせるゆったりとした３拍子の中に、オーボエのメロディーが次第に広がっていき、一瞬情熱的な響きを聞かせるが、また落ち着いた冒頭の旋律に立ち返り、ゆったりとした終結を迎える。第二楽章ではピアノのアルペッジオに続きオーボエの牧歌的なカデンツァ風のメロディーが続く。中間部の軽やかな動きではドビュッシー風の旋律、フォーレを思わせる和声にのって流れていく。簡素だがそこにただようフランスバロック舞曲のエッセンスは、サン＝サーンスの、フォーレやドビュッシーへの賛歌だろうか。第三楽章のサルタレロ風のリズムにのって、技巧的な音階的パッセージが対位法的に展開されていく。つかの間現れる情熱的な盛り上がりは、しかしすぐ爽やかな喜びの歌へと変わり、全曲を閉じる。